

12 月 定 例 教 育 委 員 会

第 45 号議案      説 明 資 料

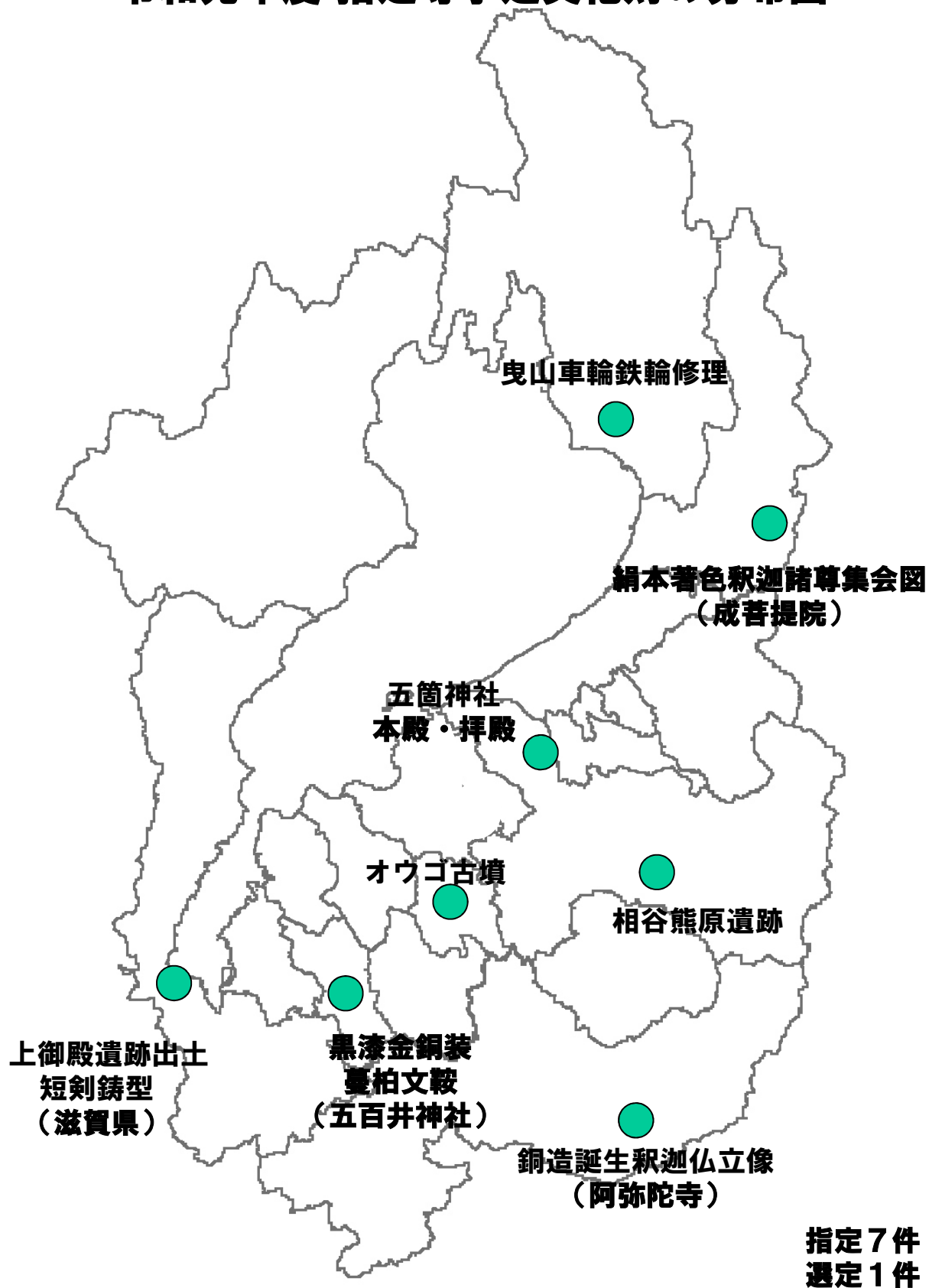
令和元年 12 月 24 日（火）

滋賀県教育委員会事務局    文化財保護課

## 目 次

	頁
令和元年度指定等予定文化財の分布図・・・・・・・・・・・・・・・・	1
指定等予定文化財	
◎建造物の部・・・・・・・・・・・・・・・・	2
五箇神社 本殿（1棟）、拝殿（1棟）	
◎絵画の部・・・・・・・・・・・・・・・・	10
絹本著色釈迦諸尊集会図	
◎彫刻の部・・・・・・・・・・・・・・・・	12
銅造誕生釈迦仏立像	
◎工芸品の部・・・・・・・・・・・・・・・・	14
黒漆金銅装蔓柏文鞍	
◎考古資料の部・・・・・・・・・・・・・・・・	16
上御殿遺跡出土短剣鋳型	
◎史跡の部・・・・・・・・・・・・・・・・	20
相谷熊原遺跡	
オウゴ古墳	
◎選定保存技術の部・・・・・・・・・・・・・・・・	24
曳山車輪鉄輪修理	
参考資料	
・滋賀県文化財保護審議会からの答申書写し	
・滋賀県文化財保護審議会委員名簿	
・文化財保護法および滋賀県文化財保護条例（抜粋）	

## 令和元年度 指定等予定文化財の分布図



# 建造物の部 (1件)

名 称	員数	構 造 形 式	所有者	所有者の 住所	所在地
五箇神社 本 殿	1 棟	三間社流造、向拝三間、正面軒唐破風付、檜皮葺  附 棟札 2 枚 天保九年戊戌十一月佳日新初同十年己亥六月廿七日 上棟の記があるもの 1 天保十龍集己亥六月念七日の記があるもの 1 文書 3 冊 天保七丙申六月覚の記があるもの 1 天保十龍次己亥臘月本社再造録の記があるもの 1 萬延元申年御家根積り書入の記があるもの 1	宗教法人 五箇神社	東近江市 宮莊町 767番地	同左
拝 殿	1 棟	桁行三間、梁間三間、向拝三間、入母屋造、銅板葺、両 側面附属屋接続、桁行二間、梁間二間、切妻造、銅板葺、 両附属屋背面廻廊接続、桁行三間、梁間一間、切妻造、 銅板葺  附 透塀 1 棟 延長二十七間、銅板葺 棟札 2 枚 文化六己巳載陽復吉日良辰の記があるもの 1 明治十五年四月吉日の記があるもの 1 文書 8 冊 癸丑寛政五年正月十六日拝殿再建企目録の記がある もの 1 文化五辰年拝殿諸拂帳の記があるもの 1 己巳文化六年正月吉日拝殿再建入用控の記がある もの 1 庚午文化七年正月吉日拝殿造立直段控の記がある もの 1 文政六癸未七月廿三日定の記があるもの 1 文政七甲申年正月十六日拝殿屋根入用帳の記がある もの 1 明治十四年三月拝殿神饌局奏楽局回廊共積り書の 記があるもの 1 明治四拾貳年一月氏神拝殿屋根葺換工事費醸金基帳 の記があるもの 1 絵図面 1 枚 正面五十分一之圖妻五十分一之圖の記があるもの			

◆建築年代

本 殿 天保 10 年(1839)【棟札】

拝 殿 文化 6 年(1809)建立【棟札】、明治 15 年(1882)増築【棟札】

◆指定の状況 本殿 東近江市指定建造物

◆説 明

- ・ 当地は愛知川下流域の西岸に位置し、元は北荘と呼ばれていたが、明治 7 年(1874)に五箇神社が鎮座していたことから宮荘に改称したと伝わる。古来より村の産土神として崇められていた。
- ・ 現在の建物は、棟札によって、本殿は天保 10 年(1839)に建立され、拝殿は文化 6 年(1809)に建立、明治 15 年(1882)に増築されたことが分かる。  
また透塀は棟札によって、明治 15 年(1882)に拝殿の増築と同時期に建立されたことがわかる。
- ・ 本殿は三間社流造で、正面に三間の向拝が取り付け、向拝屋根には軒唐破風が設けられている。  
身舎の軒廻りや妻飾り、縁の腰廻りに複雑な組物を用い、さらに向拝廻りを含めて要所々に動植物の彫刻を施した華やかな本殿である。また良材を用いた高い技術で建てられた質の高い建造物であり、本県における江戸時代末期の本殿の特徴を示しており貴重である。
- ・ 拝殿は桁行三間、梁間三間の中央部分の正面に三間の向拝を設け、両側面の後方に桁行二間、梁間二間の附属屋を接続する。向拝を設けた拝殿は珍しい。装飾は向拝廻りに繰形と絵様を施し、本殿よりは控え目であるが、大柄で迫力がある。  
中央部分の桁行三間、梁間三間の両側面に附属屋を雁行させて規模を拡大した作例で、棟札や社蔵文書から中央部分の建立と両附属屋の増築の年代が明らかであり、本県の拝殿の形式の変化を考えるうえで重要である。
- ・ 透塀は本殿の両側面と背面の三方を囲い、側面を九間、背面を九間とする。柱間装置は、側面を菱格子、背面は、現状はモルタル塗り仕上げとするが、もとは漆喰仕上げであったと推定される。五箇神社の社殿を構成する要素として重要である。
- ・ 五箇神社本殿・拝殿は、ともに良材を用いた技術的にも高い建造物で、規模も大きく意匠的にも優れている。本殿は、18 世紀以降次第に華やかとなる本県の神社建築の江戸時代末期の特徴をよく示している。拝殿は、本県の拝殿の形式の変化を考えるうえで、本殿とともに貴重である。また透塀を含めて、主要建造物が一体として残されており、本県の江戸時代から近代初期の神社建築やそれらの構えを伝える建造物として価値が高い。



■五箇神社本殿 正面



■五箇神社本殿 正側面





■五箇神社本殿 正面向拝

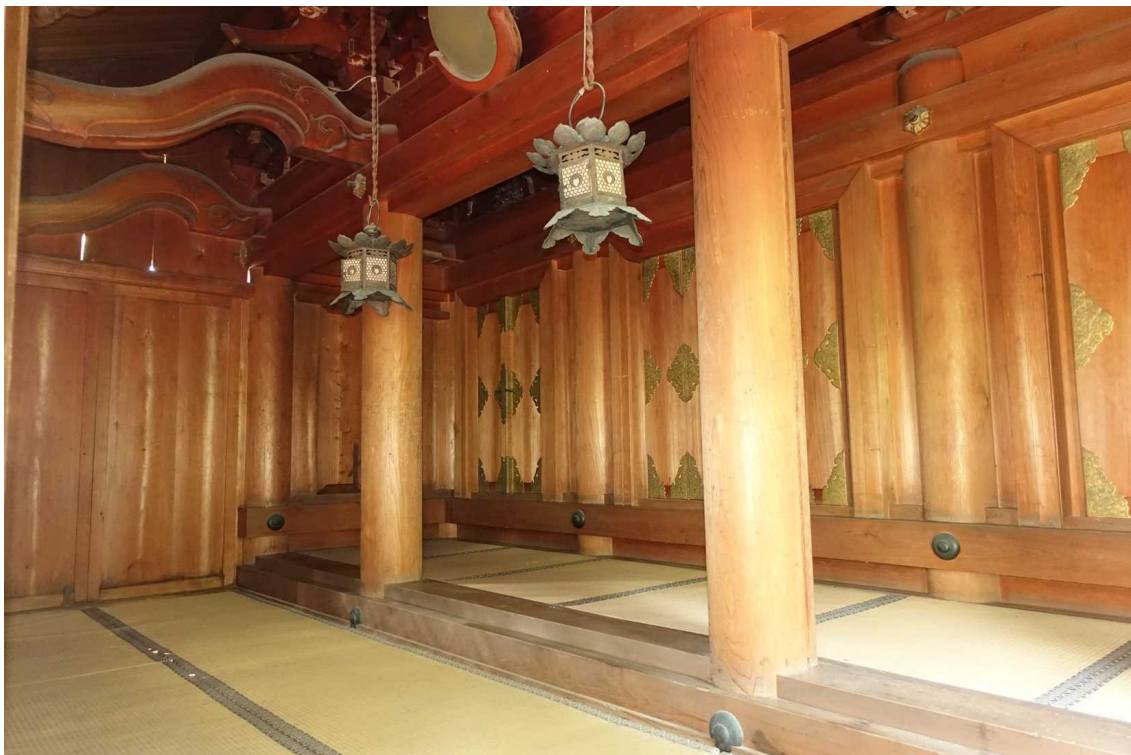


■五箇神社本殿 身舎妻飾り





■五箇神社本殿 向拝手挟



■五箇神社本殿 庇および身舎前半部





■五箇神社拝殿 正側面



■五箇神社拝殿 側面





■五箇神社拝殿 背面



■五箇神社拝殿 向拝手挟





■五箇神社透塀 側面



■五箇神社透塀 背面



## 絵画の部 (1件)

名称・員数	所有者	所有者の住所	所在地
けんぼんちやくしよくしゃかしよそんしゅうえず 絹本著色釈迦諸尊集会図 1幅	じょうぼだいじん 宗教法人成菩提院	米原市柏原1692	滋賀県立琵琶湖文化館

◆法 量 縦 108.5 cm 横 53.2 cm

◆品質構造 けんぼんちやくしよくかけふくそう  
絹本著色掛幅装

◆時 代 中国・南宋時代

◆指定の状況 未指定

### ◆説 明

- ・釈迦如来と文殊・普賢の二菩薩、梵天・帝釈天および十大弟子を整然と配し、中央に「南無大乘妙法蓮華經」と記した宝塔を安置していることから、釈迦が法華經を説いた折に、法華經を護持する諸菩薩、諸天が参集する様を描いたものと考えられる。画面左下隅に「大宋供進画士李安口筆」の落款があり、中国・宋の李某なる画師によって描かれたことがわかる。本図の伝来についての詳細は不明であるが、近世末期の時点では成菩提院に伝来していた。
- ・仏菩薩の理知的で穏やかな面貌、肉身を象る繊細な描線、彩色にみられる寒色と暖色の対比、諸尊の着衣や獅子・象の背に懸けられた障泥（泥よけの飾り）に施された精緻で的確な文様表現など、総じて明るく温和な作風は、南宋時代の仏画に共通する造形的特色である。本図と近い作風を示すのが南宋時代末期の作とされる京都府・満願寺の三仏諸尊集会図（重要文化財）である。以上の点から、本図の製作時期は南宋時代末期の13世紀後半頃と推定される。
- ・作者の李某についての詳細は不明で、現時点で同様の落款を有する作例が見出されていない。本図と作風の近い南宋時代の仏画が、当時の中国を代表する港湾都市の慶元府（現在の浙江省寧波）周辺で多数制作されていたことから、作者は寧波を活動拠点としていた画師であった可能性が高い。当時の寧波は日本と中国の交易における中国側の唯一の玄関口であるとともに、天台浄土教、仏舎利信仰、禪宗をはじめとする仏教文化の聖地であり、中国から帰国する僧侶や商人たちによって当地で製作された仏画が多数舶載された。これらは寧波仏画と総称される。
- ・滋賀県内には東近江市・永源寺の地藏十王図（陸信忠筆、重要文化財）や大津市・西教寺の天台大師像（張思訓筆、重要文化財）、長浜市・宝厳寺の北斗九星像（重要文化財）など、南宋時代の仏画が少なからず伝来する。近年、広く知られることとなった本図の出来栄えはこれらの作例と比べても遜色なく、線描および彩色ともに洗練された秀作で、絵画史上評価すべき点が多い。



絹本著色釈迦諸尊集会図 1幅 成菩提院

## 彫刻の部 （１件）

名称・員数	所有者	所有者の住所	所在地
どうどうたんじょうしゃかぶつりゅうどう 銅造誕生釈迦仏立像 1 軀	宗教法人阿弥陀寺	甲賀市甲賀町櫟野1173	同左

◆法 量 像高 10.4 cm

◆品質構造 銅製鑄造

◆時 代 奈良時代

◆指定の状況 甲賀市指定有形文化財

◆説 明

- ・誕生釈迦仏は、毎年４月８日に釈迦の誕生を祝う灌仏会<sup>かんぶつえ</sup>の本尊として用いられる。仏伝（釈迦の生涯を伝える経典）で説かれるように、右手をあげて天を指し、左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と唱えた誕生直後の釈迦の姿をあらわす。誕生釈迦仏の単独像は中国、朝鮮半島、日本に作例があり、像高５～２０センチほどの銅像が多い。灌仏会の法会は、日本においてすでに飛鳥時代から各寺院でおこなわれ、法隆寺をはじめとする寺院の資財帳（財産目録）にも誕生釈迦仏の記載が確認できる。
- ・本像は、上半身が裸形で下半身に<sup>くん</sup>裙（スカート上の着衣）をまとう。あどけない表情はいかにも幼児を思わせる。本像については、蛍光エックス線分析が実施され、極めて高い純度の銅が検出された。一般的に古代の銅製仏像、とりわけ飛鳥・白鳳時代（７世紀）から奈良時代（８世紀）の作例は、銅の含有率が９０％から９５％を超えるものが一般的であると報告されており、本像も同時期の作例と考えられる。
- ・飛鳥・白鳳時代（７世紀）の誕生釈迦仏にみられる頭部過大な表現に比べ、本像は、頭部の大きさが体躯とバランスを保ち、上半身と下半身の比率もほぼ等しい。体躯は比較的肉付きを持たせており、肩や胸に張りがある。さらに肩から手先にかけての肉取りと肘を境とする分節表現は自然で、より人体表現に近い。着衣の表現に注目すると、飛鳥・白鳳時代の誕生仏は衣文表現が直線的であるのに対し、本像のそれは正面および背面ともに曲線を基調とする左右非対称なもので、より柔軟で複雑化している。さらに裙の折り返し部や打ち合わせ部にみられる自然な翻りの表現も洗練されている。これらの作風から本像は奈良時代（８世紀）の造像であることを示している。
- ・滋賀県内に伝来する誕生釈迦仏像は白鳳時代の作とされる東近江市・専修院像、奈良時代の作とされる守山市・大光寺像、湖南市・善水寺像（重要文化財）などが知られる。なかでも善水寺像は東大寺像（国宝）と並ぶわが国の誕生釈迦仏像の優品として知られている。本像の完成度は、滋賀県内において善水寺像に次ぐもので、奈良時代における誕生釈迦仏像の貴重な作例として彫刻史上高い意義を有するものである。





銅造誕生釈迦仏立像 1 軀 阿弥陀寺

## 工芸品の部 (1件)

名称・員数	所有者	所有者の住所	所在地
黒漆金銅装蔓柏文鞍 1背 <small>こくしつこんどうそうつるかしわもんくら</small>	宗教法人五百井神社 <small>いおのいじんじや</small>	栗東市下戸山20	栗東歴史民俗博物館

◆法 量 前輪高 22.8 cm 後輪高 28.4 cm 居木長 37.5 cm

◆品質構造 もくぞううるしめりこんどうそう  
木造漆塗金銅装

◆時 代 鎌倉時代

◆指定の状況 栗東市指定有形文化財

◆説 明

- ・前輪・後輪および二枚の居木（前輪と後輪をつなぐ部材）からなる和鞍（和様の鞍）である。全面が虫損、朽損に見舞われ、現状、素地を露出しているが一部に黒漆を塗布した痕跡があることから、当初は全面に漆による加飾が施されていたようである。本品は、両輪の外面に海・磯と呼ばれる段差を設けない海無鞍であること、前輪に手形と呼ばれる割り込みを入れないこと、居木の幅が大きいことなど、古代鞍の特徴を備えている。
- ・本作で興味深いのは、両輪外側に施された金銅板の蔓柏文である。日本の鞍の装飾は、螺鈿（貝殻の破片をはめ込んだもの）や平文（漆面に金や銀を薄い板状にして貼り付けたもの）が主流で、本作のように金銅板を用いる例は、現存作例ではきわめて稀である。蔓柏文の柏葉表面に広がる葉脈は、一本ずつ丁寧に刻まれ、蔓唐草も無骨ながらおおらかにあらわされる。柏葉および蔓唐草はともに写実的で意匠化するまでには至っていない。本品のように写実化された自然モチーフが器物に取り込まれるのは、鎌倉時代以降のことで、製作時期の上限を示唆している。
- ・もう一点、金銅板の文様表現で特筆されるのは、三葉形花文である。このモチーフの源流は宝相華で、岩手県・中尊寺の金色堂内荘厳や奈良県・春日大社の古神宝類など平安時代末期（12世紀）の螺鈿装飾の作例にみられる。本作はこれら螺鈿装飾による宝相華の風合いを金銅板で継承しようと試みた注目すべき作例である。以上、本作の造形的特色をまとめると、鞍の外観は鎌倉時代の作例と共通し、金銅板の蔓柏文にみられる写実性は鎌倉時代以降の作例に顕著であることから、本品の製作時期は鎌倉時代（13世紀～14世紀前半）に位置づけられる。
- ・滋賀県内に伝来する鞍の古例として、近江八幡市・大嶋神社・奥津嶋神社の黒漆鞍（重要文化財）および菊花螺鈿鞍（重要文化財）が知られ、前者が平安時代後期（12世紀）、後者が鎌倉時代（13世紀）の製作とされる。本作はこれらに次ぐ古作であり、損傷があるとはいえ、類品にしばしばみられる後世の修理や改変がなく、当初の姿をよくとどめている。装飾に関しては、金銅製の蔓柏文という希少な意匠を備え、平安時代末期に盛行した螺鈿装飾の意匠を金銅板で表現しようとする趣向がうかがえる。このように本作は中世における工芸意匠の展開を考察するうえで興味深い例を示すものとして高く評価される。



黒漆金銅装蔓柏文鞍 1 背 五百井神社



## 考古資料の部 (1件)

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
かみごてんいせきしゅつどたんけんいがた 上御殿遺跡出土短剣鋳型	1 対	滋賀県	大津市京町四丁目 1 番地 1	滋賀県埋蔵文化財 センター

◆区 分 有形文化財（考古資料）

◆準じた基準 [考古資料の部]

二 銅鐸、銅剣、銅鉾その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

◆指定の状況 未指定

◆時 代 弥生時代中期から後期

◆説 明

鋳型 1（鋳込み面を下に向け、対になる鋳型 2 の上面に合わせた状態で出土。）

法量 長さ 29.9 cm 幅 8.8 cm 厚さ 3.6 cm 重量 1,565 g

鋳型 2（鋳込み面を上に向け、鋳型 1 の下側で地山面に置かれた出土。）

法量 長さ 29.8 cm 幅 8.8 cm 厚さ 4.4 cm 重量 908 g

- 上御殿遺跡（高島市安曇川町三尾里地先所在）の発掘調査で平成 25 年度に出土した。発掘調査区  
内の微高地が谷地形に向かって低くなる落ち込み遺構の肩部付近で、一对の鋳型が鋳込み面を合  
わせ、地山面直上に単独で置かれた状況で検出されたものである。
- 鋳型の材質はシルト岩で、長さ約 30 cm の直方体の素材を摺り切り分割し、<sup>そうかんえがしらたんけん</sup>双環柄頭短剣を彫り込  
んだ<sup>いっちゅうしき</sup>一<sup>い</sup>鋳<sup>い</sup>式<sup>しき</sup>の鋳型で、鋳造痕跡は認められない。
- 双環柄頭短剣の彫り込みは全長 28.4 cm、柄長 8.1 cm、剣身長 21.0 cm、深さ 0.15～0.2 cm を測り、  
柄部に<sup>ふくごうきょしもん</sup>複合鋸歯文と<sup>あやすぎもん</sup>綾杉文を施し、表裏で区画と配置が異なる。剣身は直刃で<sup>しのぎ</sup>鎬<sup>ひ</sup>が無い。
- 剣の柄頭上部から剣先に至る中心、柄と剣身の境の左右に割り付け線が刻まれ、鋳型側面には、割  
り付け中心線の延長上の柄頭側と剣先側、柄と剣身の境界線延長上の左右側面には断面 V 字形の  
<sup>あいじろし</sup>合印が刻まれている。
- 彫り込まれた短剣の特徴から弥生時代中期から後期のものと考えられる。
- 鋳型に彫られた双環柄頭短剣の特徴は、一鋳式で双環、直刃、柄に文様を持つ点で中国北方地域の<sup>しゅんじゅうせんごくじだい</sup>春秋戦国時代（BC 770～221）のオルドス青銅短剣に類似するが、細部では相違点も多く、国  
内、国外とも同種の銅剣は出土していない。一方、綾杉文と複合鋸歯文を施す柄の文様は、弥生時  
代の銅鐸や銅剣の文様と共通するものであり、鋳型素材の摺り切り技法や双環の正円を刻む技法  
に国内の玉造りの技法等が用いられた可能性がある。
- このことから、本資料は朝鮮半島を通じて九州地方に伝わった銅剣とは別系統の銅剣の存在を示  
すとともに、その系譜が日本海経由でオルドス式銅剣に関わる技術が本県に伝わってきていた可  
能性を示唆する形状と意匠を備えた希少な鋳型であり、弥生時代の青銅器文化を解明する上で重  
要な資料である。
- また、これまで国内で出土した鋳型の多くが製品の製造過程で破壊され、さらにその断片が砥石  
等に転用される事例が多い中において、この鋳型は使用前の形状が良好に残存し、素材の保存状  
態も良く、石製鋳型の実態や銅剣の鋳造技術を知る上でも極めて資料的価値の高いものである。
- 県では平成 31 年 3 月に本資料を掲載した発掘調査報告書『鴨川補助広域基幹河川改修事業（青井  
川）に伴う発掘調査報告書 3 上御殿遺跡』を刊行し、鋳型の資料的価値を明確にしたことから、  
この度、県の有形文化財に指定し、その保存を図るものである。



鑄型一

鑄型二



鑄型一

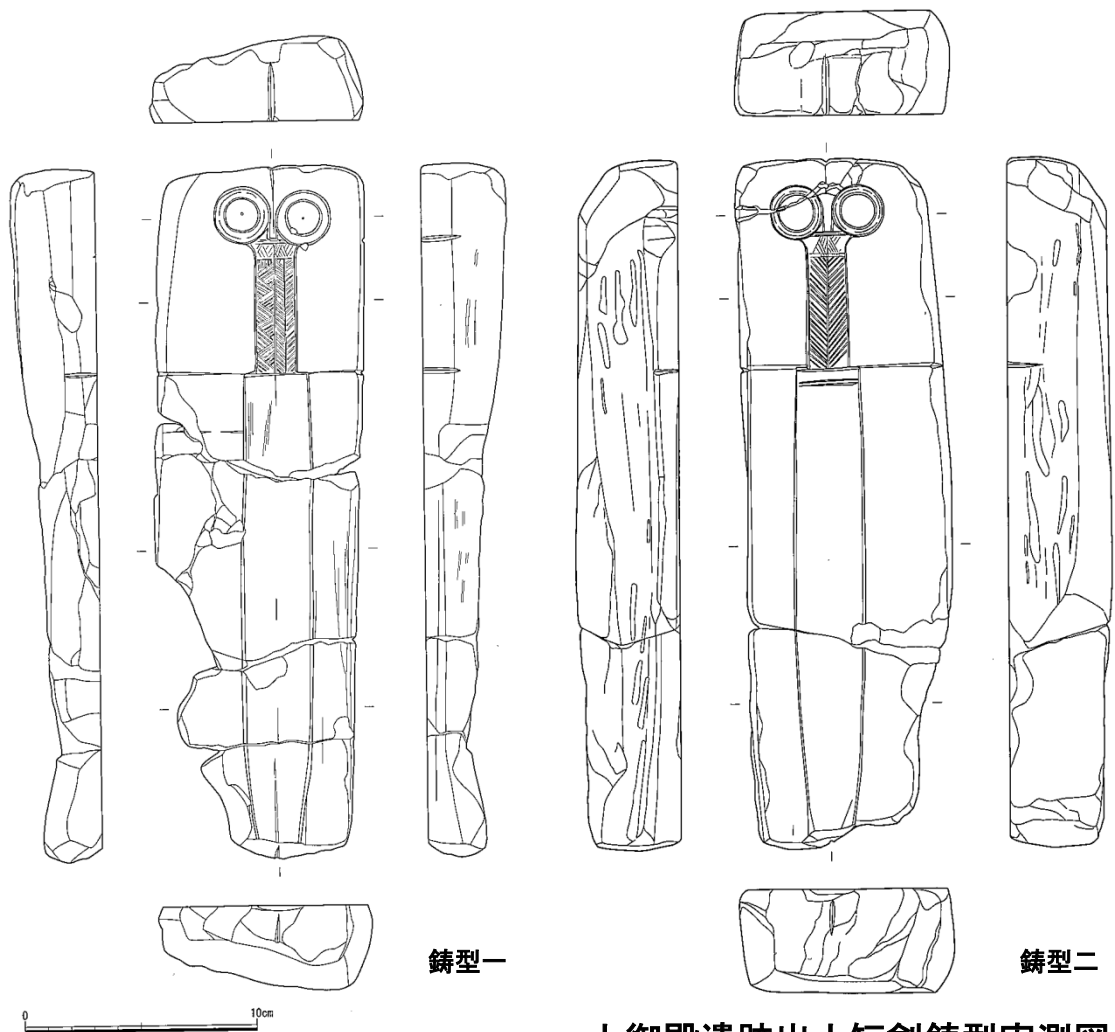
鑄型二



上御殿遺跡出土短剣鑄型



上御殿遺跡出土短剣鑄型



上御殿遺跡出土短剣鑄型実測図





## 史跡の部 （2件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
相谷熊原遺跡	1 件	個人 7 名、 東近江市	東近江市永源寺相谷町字熊原 1637 番地 ほか 10 筆	同左 (19,578.2 m <sup>2</sup> )

### ◆ 準 じ た 基 準 [史跡の部]

一 貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡

◆ 指 定 面 積 19,578.2m<sup>2</sup>

◆ 時 代 縄文時代（草創期）

◆ 指 定 の 状 況 未指定

### ◆ 説 明

- 相谷熊原遺跡は、東近江市域の東南部、永源寺相谷町に所在する。この場所は、滋賀県東部を琵琶湖へと貫流する愛知川が、山間部から湖東平野へと流れ出す付近に位置する。平成21・22年度に実施された県営ほ場整備事業に伴う発掘調査によって、縄文時代草創期から晩期にかけての遺構・遺物を検出した。
- 発掘調査では5棟の竪穴建物跡が検出された。竪穴建物跡はいずれも不整円形プランを呈し、最も大きいもので径7.5m、深度は最も深いもので1.1mを測る。
- 5棟のうち最も標高が高い地点で検出された竪穴建物跡の埋土中から、国内最古級の土偶が1点出土した。また、建物跡から出土した土器について、付着炭化物の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、約13,000年前（縄文時代草創期後半）のものであることが判明した。
- 建物は草創期の遺構としては規模が大きく、比較的安定的な居住が営まれていたことを示している。建物内から出土した磨石・石皿等は重量があるため、携帯しながらの移動生活には適さないことから、比較的定住的な生活であったことを示すとともに、植物質食料の利用がその生活を支えていたことを示唆している。
- これら縄文時代草創期の遺構群についてはその重要性を鑑み、その保存について関係機関と協議を行い、5棟のうち4棟の竪穴建物跡を検出した調査区を含む範囲については、工事の設計変更により現水田下に現地保存を図った。なお、土偶が出土した竪穴建物跡を検出した調査区については、設計変更による現地保存ができないため記録保存を図った。
- 以上、相谷熊原遺跡で発見された縄文時代草創期の遺構群は、日本列島内における集落遺跡の初現例の一例であるとともに、遺構が極めて良好に残存していた希少な事例として、先に県指定を受けた出土遺物群と合わせ、高く評価することができる。これらは縄文時代草創期の生業を解明するうえで不可欠な資料であり、文化財としての歴史的価値は極めて高く、本県における縄文時代開始期の様相を示す資料として県指定史跡に指定し、将来に向け保存を図るものである。



調査地位置



竪穴建物跡群（北から）



竪穴建物跡から出土した土偶



土偶が出土した竪穴建物跡 D1-086（北西から）



竪穴建物跡内出土土器



竪穴建物跡 E2-006（東から）



竪穴建物跡内出土石器



## 史跡の部 （2件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
オウゴ古墳	1 件	個人 6 名、 竜王町	蒲生郡竜王町薬師 1115 番地 ほか 6 筆	同左 (内 1,230.78 m <sup>2</sup> )

### ◆区 分 史跡

### ◆準じた基準 [史跡の部]

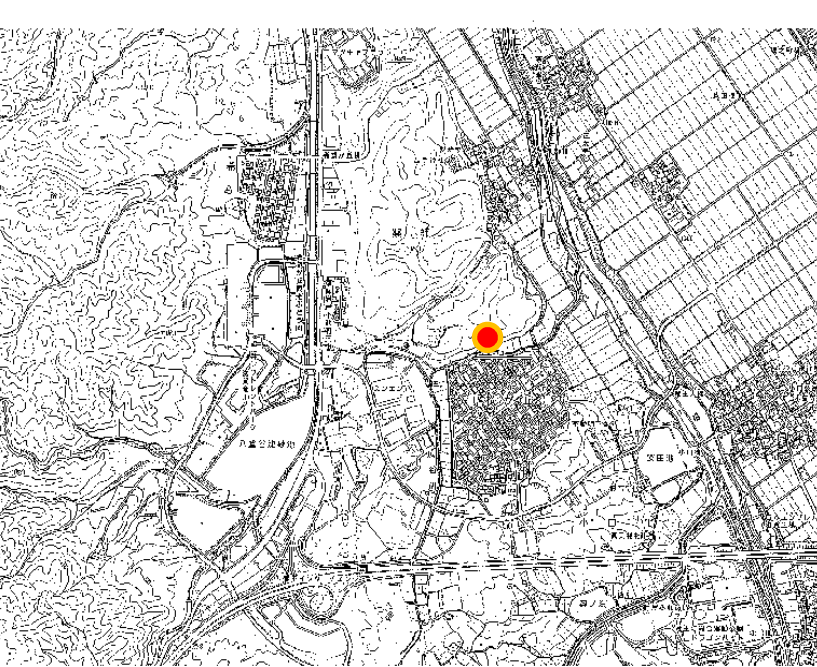
一 貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡

### ◆時 代 6 世紀後半～7 世紀初頭頃

### ◆指定の状況 なし

### ◆説 明

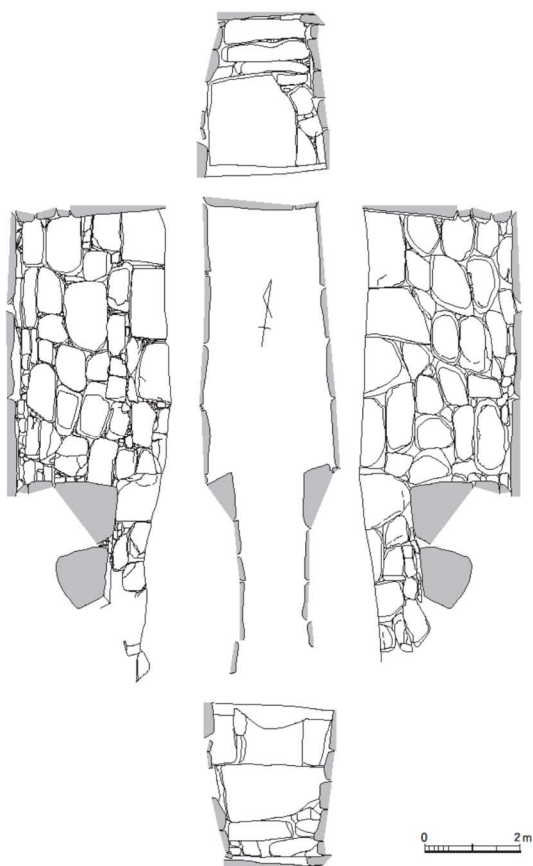
- ・ オウゴ古墳は琵琶湖の東岸にあって、野洲川流域と日野川流域を隔てる鏡山丘陵の東麓にあたる。祖父川の支流である湧川の形成する谷筋の谷口付近に面して立地する。この谷筋は、野洲川中・上流域への交通路でもある。
- ・ 古墳は一辺約 20m の方墳とされ、墳丘の高さは、斜面下部（南側）側で約 5m である。現状では、墳丘には埴輪や葺石は認められない。また、墳丘を中心に丘陵尾根斜面を幅約 35 m、奥行き約 35m の方形に造成したかのような状況が確認できる。
- ・ 埋葬施設は巨石を用いた大型の両袖式の横穴式石室である。現状で、全長約 10.5m、玄室長 5.8m、同最大幅 2.6m、同高 3.1m、羨道幅 1.5m、高さ 1m の規模である。奥壁は最下段に巨石を置いた上に扁平な石材を 3 段積み上げる。側壁は大型の石材を 4～6 段に積み上げる。石材はいずれも花崗岩である。
- ・ オウゴ古墳は、この横穴式石室の特徴から、6 世紀後半から 7 世紀初頭頃に築造されたと判断できる。この時期では地域で傑出した墳丘や横穴式石室の規模で、地域の首長墓の一基として評価できる。
- ・ オウゴ古墳が立地する湧川の上流地域においては、前方後円墳である岩屋古墳（墳長 36m）が存在し、オウゴ古墳に先行する 6 世紀中頃から後半にかけて築造された。
- ・ オウゴ古墳が築造された 6 世紀後半から 7 世紀初頭には、古墳時代の中心的存在であった前方後円墳の築造が終焉を迎え、有力古墳の墳形が方墳や円墳、多角形墳などに変化する。岩屋古墳からオウゴ古墳への変化は、まさにこの変化を示す。
- ・ 滋賀県内において、前方後円墳の終焉段階に、前方後円墳から変化して築造された方墳の事例は確認されておらず、オウゴ古墳が唯一の事例である。
- ・ また、6 世紀後半から 8 世紀にかけて鏡山北麓では須恵器生産が盛んに行われる。オウゴ古墳の築造は、単に首長墓における墳形の変化のみならず、須恵器生産に示される社会体制の変化に対応している可能性も考えられる。
- ・ 以上、オウゴ古墳は、本県の古墳時代の終焉段階の状況を示し、本格的な国家形成が開始される飛鳥時代に向けての歴史を理解するためにも不可欠な資料である。文化財としての歴史的価値は高く、本県における重要な史跡として将来に向け保存を図る必要がある。



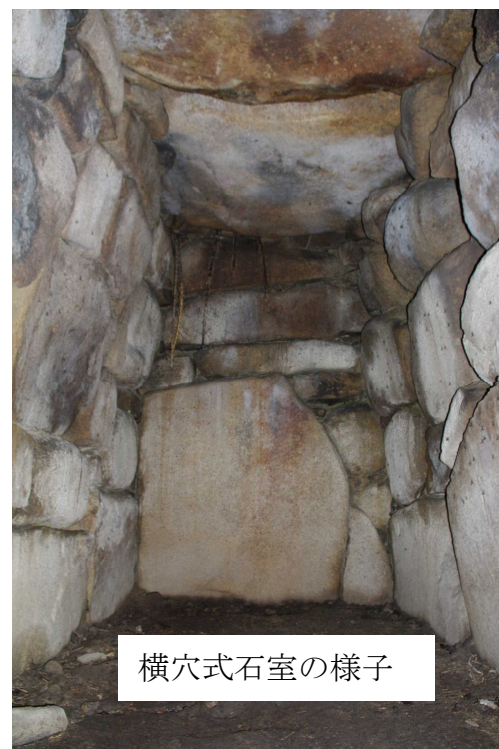
オウゴ古墳の位置



墳丘測量図と指定の範囲



横穴式石室の実測図



横穴式石室の様子



墳丘の様子

## 選定保存技術の部【選定】（１件）

名 称	保 持 者	所 在 地
曳山車輪鉄輪修理	草野 清弘 草野 昌基	長浜市 長浜市

### ◆説 明

- ・ 本件技術は、曳山の木製の車輪の外周部に鉄の輪を嵌め込む技術で、「焼き嵌め」もしくは「輪締め」とも呼ばれる技術である。
- ・ 「焼き嵌め」は、もともとは荷車などの木製の車輪を保護し、強度を保つために、車輪に鉄輪を装着することにより普及したとされ、現代社会においては失われつつある技術で、山・鉾・屋台行事に使用される曳山の木製車輪の製作や修理の際の技術としてかろうじて生き残っている。
- ・ 曳山の車輪は、重量のある曳山本体を支え、巡行時の安全を確保するために極めて重要なものであり、その車輪に嵌まる鉄輪は、木製車輪の割れや分裂等を防ぐ役割を果たしている。
- ・ 県内の曳山においては、長浜曳山祭、米原曳山祭、日野祭、水口曳山祭などの曳山の車輪に鉄輪が嵌っており、定期的な嵌め直しが行われている。
- ・ 焼き嵌めの主な工程としては、①車輪の外周より少し切り縮めた鉄輪を用意する。②火をおこした炉の中に鉄輪を入れ熱する。③炉から鉄輪を引き上げ、車輪に鉄輪を嵌め込み、間髪入れずに大量の水を鉄輪にかけて急冷する。
- ・ これらの工程において、車輪の外周よりいかに鉄輪を小さくするか、炉から鉄輪を引き上げるタイミングなどについては経験によるところとなる。
- ・ これまでに、曳山車輪の鉄輪修理を数多く経験し、技術を磨き、その技術を正しく体得し、これに精通している２名を保持者の認定候補者とした。  
草野 清弘 氏  
草野 昌基 氏
- ・ 保持者の草野清弘氏、昌基氏は、兄弟である。父 草野清隆氏が営む鉄工所「鍛冶建」において、職人として勤務するとともに、清隆氏とともに焼き嵌めを行い、経験を重ね、技術を体得してきた。父の死後、家業を継いで、現在に至っている。
- ・ 県内各地の曳山祭では、毎年数多くの曳山が巡行し、使い続けていく文化財として保存を図っ



ていく必要があり、曳山は定期的に修理が必要となってくる。車輪の鉄輪は、地面に接すると曳山本体の重量により鉄輪が伸びたり、路面との衝撃で破断したりして、嵌め直しは避けることができない。また近年は、車輪用に良質の原材料を確保することが難しくなっていることもあり、曳山を適切に保存し、祭りの保存継承を図っていくためには、伝統的な車輪修理の技術を保存していくことが不可欠であり、「焼き嵌め」を文化財保存技術として選定する必要がある。



草野清弘 氏 （右）      草野昌基 氏 （左）





滋 文 保 審 第 7 号

令和元年(2019年)11月11日

滋賀県教育委員会教育長 福永 忠克 様

滋賀県文化財保護審議会  
会 長 根立 研介



滋賀県指定有形文化財等の指定等について（答申）

令和元年(2019年)8月2日付け滋教委文保第1340号で諮問のありました標記のことについて下記のとおり答申します。

記

- 1 別表1の有形文化財等を滋賀県文化財保護条例（昭和31年滋賀県条例第57号、以下「条例」という。）第4条第1項および第34条第1項の規定による滋賀県指定有形文化財等に指定することは適当と認めます。
- 2 別表2の選定保存技術を条例第40条の5第1項の規定による滋賀県選定保存技術に選定することは適当と認めます。



【別表 1】

建造物の部 (1 件)

名 称	員数	構 造 形 式	所有者	所有者の 住所	所在地
五箇神社 本 殿	1 棟	三間社流造、向拝三間、正面軒唐破風付、檜皮葺  附 棟札 2 枚 天保九年戊戌十一月佳日新初同十年己亥六月廿七日 上棟の記があるもの 1 天保十龍集己亥六月念七日の記があるもの 1 文書 3 冊 天保七丙申六月覚の記があるもの 1 天保十龍次己亥蠟月本社再造録の記があるもの 1 萬延元申年御家根積り書入の記があるもの 1	宗教法人 五箇神社	東近江市 宮荘町 767番地	同 左
拝 殿	1 棟	桁行三間、梁間三間、向拝三間、入母屋造、銅板葺、両 側面附属屋接続、桁行二間、梁間二間、切妻造、銅板葺、 両附属屋背面廻廊接続、桁行三間、梁間一間、切妻造、 銅板葺  附 透塀 1 棟 延長二十七間、銅板葺 棟札 2 枚 文化六己巳載陽復吉日良辰の記があるもの 1 明治十五年四月吉日の記があるもの 1 文書 8 冊 癸丑寛政五年正月十六日拝殿再建企目録の記がある もの 1 文化五辰年拝殿諸拂帳の記があるもの 1 己巳文化六年正月吉日拝殿再建入用控の記がある もの 1 庚午文化七年正月吉日拝殿造立直段控の記がある もの 1 文政六癸未七月廿三日定の記があるもの 1 文政七甲申年正月十六日拝殿屋根入用帳の記がある もの 1 明治十四年三月拝殿神饌局奏楽局回廊共積り書の 記があるもの 1 明治四拾貳年一月氏神拝殿屋根葺換工事費醸金基帳 の記があるもの 1 絵図面 1 枚 正面五十分一之圖妻五十分一之圖の記があるもの			

### 絵画の部 （１件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
けんぽんちやくしよくしゃかしよそんしゅうえず 絹本著色釈迦諸尊集会図	ぶく 1 幅	宗教法人 じょうぼだいじん 成菩提院	米原市柏原 1692 番地	滋賀県立 琵琶湖文化館

### 彫刻の部 （１件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
どうぞうたんじょうしゃかぶつりゅうぞう 銅造誕生釈迦仏立像	く 1 軀	宗教法人 阿弥陀寺	甲賀市甲賀町櫟野 1173 番地	同左

### 工芸品の部 （１件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
こくしつこんどうそうつるかしわもんくら 黒漆金銅装蔓柏文鞍	せ 1 背	宗教法人 いおのいじんじゃ 五百井神社	栗東市下戸山 20 番地	栗東歴史民俗 博物館

### 考古資料の部 （１件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
かみごてんいせきしゅつどたんけんいがた 上御殿遺跡出土短剣鑄型	1 対	滋賀県	大津市京町四丁目 1 番地 1	滋賀県埋蔵文 化財センター

## 史跡の部 （2件）

名 称	員数	所 有 者	所 有 者 の 住 所	所 在 地
相谷熊原遺跡	1 件	個人 7 名、 東近江市	東近江市永源寺相谷町字熊原 1637 番地 ほか 10 筆	同左 (19,578.2 m <sup>2</sup> )
オウゴ古墳	1 件	個人 6 名、 竜王町	蒲生郡竜王町薬師 1115 番地 ほか 6 筆	同左 (内 1,230.78 m <sup>2</sup> )



**【別表 2】****選定保存技術の部【選定】（1 件）**

名 称	所 在 地
曳山車輪鉄輪修理	
草野 清弘	長浜市末広町 5-55-14
草野 昌基	長浜市末広町 6-22

指定	7 件
選定	1 件
計	8 件

# 滋賀県文化財保護審議会委員名簿

(敬称省略・50音順)

委員名	現 職 等	所属部会	備考
イシダ ジュンイチロウ 石田 潤一郎	京都工芸繊維大学名誉教授	建造物	
イチカワ ヒデユキ 市川 秀之	滋賀県立大学教授	民俗文化財	
イワサキ ナオコ 岩崎 奈緒子	京都大学総合博物館教授	美術工芸	
オガキ ヨシユキ 小嵯 善通	成安造形大学教授	美術工芸	
キシ ヤスコ 岸 泰子	京都府立大学准教授	建造物	
クボ トモヤス 久保 智康	京都国立博物館名誉館員	美術工芸	
クロダ リュウジ 黒田 龍二	神戸大学大学院教授	建造物	
サカイ ヒデア 坂井 秀弥	奈良大学教授	史跡名勝天然記念物	
スガマ サチコ 洲鎌 佐智子	京都文化博物館主任学芸員	民俗文化財 無形文化財	
ダテ ヒトミ 伊達 仁美	京都造形芸術大学教授	民俗文化財 無形文化財	
トイ ミチロ 土井 通弘	就実大学名誉教授	美術工芸	
ナカ ユキヒロ 仲 隆裕	京都造形芸術大学教授	史跡名勝天然記念物	
ネグチ ケンスケ 根立 研介	京都大学大学院教授	美術工芸	会長
ヒシダ テツオ 菱田 哲郎	京都府立大学教授	史跡名勝天然記念物	
マエカヨ 前迫 ゆり	大阪産業大学教授	史跡名勝天然記念物	副会長
マスキ リュウスケ 増記 隆介	神戸大学大学院准教授	美術工芸	
マツモト ナオコ 松本 直子	岡山大学大学院教授	史跡名勝天然記念物	
モリ ユキオ 森 隆男	元関西大学教授	民俗文化財	
ヤマカワ アキ 山川 暁	京都国立博物館企画室長 兼工芸室長	美術工芸	
ヤマムラ アキ 山村 亜希	京都大学教授	史跡名勝天然記念物	

【任期】 自：令和元年6月1日 至：令和3年5月31日

## 文化財保護法（抜粋）

昭和25年5月30日

法律第214号

（地方公共団体の事務）

第182条 地方公共団体は、文化財の管理、修理、復旧、公開その他その保存及び活用に要する経費につき補助することができる。

2 地方公共団体は、条例の定めるところにより、重要文化財、重要無形文化財、重要有形民俗文化財、重要無形民俗文化財及び史跡名勝天然記念物以外の文化財で当該地方公共団体の区域内に存するもののうち重要なものを指定して、その保存及び活用のため必要な措置を講ずることができる。

3 前項に規定する条例の制定若しくはその改廃又は同項に規定する文化財の指定若しくはその解除を行つた場合には、教育委員会は、文部科学省令の定めるところにより、文化庁長官にその旨を報告しなければならない。

（地方文化財保護審議会）

第190条 都道府県及び市町村の教育委員会に、条例の定めるところにより、地方文化財保護審議会を置くことができる。

2 地方文化財保護審議会は、都道府県又は市町村の教育委員会の諮問に応じて、文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議し、並びにこれらの事項に関して当該都道府県又は市町村の教育委員会に建議する。

3 地方文化財保護審議会の組織及び運営に関し必要な事項は、条例で定める。

## 滋賀県文化財保護条例（抜粋）

昭和31年12月25日

滋賀県条例第57号

### 第2章 県指定有形文化財

（指定）

第4条 教育委員会は、県の区域内に存する有形文化財（法第27条第1項の規定により重要文化財に指定されたものを除く。以下同じ。）のうち県にとって重要なものを滋賀県指定有形文化財（以下「県指定有形文化財」という。）に指定することができる。

3 第1項の規定による指定をするには、教育委員会は、あらかじめ、別に定める滋賀県文化財保護審議会（以下「文化財保護審議会」という。）に諮問しなければならない。

### 第5章 県指定史跡名勝天然記念物

（指定）

第34条 教育委員会は、県の区域内に存する記念物（法第109条第1項の規定により史跡、名勝または天然記念物に指定されたものを除く。）のうち県にとって重要なものを滋賀県指定史跡、滋賀県指定名勝または滋賀県指定天然記念物（以下「県指定史跡名勝天然記念物」と総称する。）に指定することができる。

2 第4条第2項から第5項までの規定は、前項の規定による指定について準用する。

### 第5章の3 県選定保存技術

（選定等）

第40条の5 教育委員会は、県の区域内に存する伝統的な技術または技能で文化財の保存のために欠くことのできないもの（法第147条第1項の規定により選定保存技術に選定されたものを除く。）のうち県として保存の措置を講ずる必要があるものを滋賀県選定保存技術（以下「県選定保存技術」という。）として選定することができる。

## 滋賀県文化財保護条例施行規則（抜粋）

昭和32年8月15日

滋賀県教育委員会規則第7号

（指定等の基準）

第21条 条例およびこの規則の規定による指定、認定、選定または選択の基準については、国の基準の例によるものとする。